

◆伊藤洋二 選 ～松尾芭蕉の俳句より～

鐘つかぬ里は何をか春の暮

最近、うるさいと言われるので、除夜の鐘を中止にしたり昼間に鳴らしたりするらしい。保育所や幼稚園、公園も、子どもの声がうるさいからと、開設を断念したり延期せざるを得ないとか。過密や過疎、少子高齢の問題など、地域の特性や時代背景もあるのだろうが、何よりも世代間交流の希薄化が原因ではなかろうか。お互いに耳栓を取って話し合えないものか。

夕顔や酔てかほ出す窓の穴

朝顔によく似た花をつけるが、その咲く時間帯によって、それぞれ昼顔、夕顔、夜顔と呼ばれる花がある。しかし、この「四姉妹」、一人だけ違っているのは誰でしょう。答えは「夕顔」さん。朝顔、昼顔、夜顔はヒルガオ科だが、夕顔だけはウリ科で大きな実をつける。実は、瓢「ふくべ」「ひさご」と呼ばれ、それを干したものが、干瓢（かんぴょう）。瓢箪（ひょうたん）とは同一種だが、こちらは食べられず、箪（容器）として利用される。

ほととぎすうらみの滝のうらおもて

「うらみ」には、「裏見」と「恨み」がかかっている。ほととぎすの音が聞こえていたのに、滝の裏側に入ると聞こえないので残念であるということである。ホトトギスは、子規、時鳥、不如帰、など様々な漢字表記があるが、芭蕉の頃は、ホトトギスに「郭公」の字を当てていたようで、句に郭公とあってもホトトギスとして、読まなければならないらしい。

夏来てもただひとつ葉の一葉哉

「ひとつ葉」は、ウラボシ科の常緑シダ植物。根茎から二〇～三十センチの細長い葉を一枚ずつつける。地面に何枚もの葉っぱが刺さっているように見える。俳句では夏の季語。夏になっても一葉のままでいることに、芭蕉自身の気持ちや立場を重ねたのだろう。ちなみに俳句では「一葉」は「ひとは」と読んで「桐の葉」を指し、秋の季語となるが、この句の場合は、単に一枚の葉っぱという意味である。

京にても京なつかしやほととぎす

その昔、ホトトギスの鳴き声は、京の歌人達にも歌われてきた。その声を聞いていると、京にいるにもかかわらず、遙か昔の京が懐かしく感じられるようだ。京都には、延暦十三年から明治二年まで、一〇七五年間の文化がぎっしり詰っている。京の都には、世界文化遺産が十七箇所もある。

秋風のふけども青し栗の毬

不老の秘訣は、血管の九十九%を占める毛細血管の血流アップと、二百個の骨への適度な刺激なのだそうだ。その方法は、その場スキップと、その場ジャンプ。第二の心臓である「ふくらはぎ」の血液のポンプ機能を上げ、踵を刺激することで、血流が良くなり、骨細胞に振動刺激を与えることができる。使わない部位は退化する。全く老化しないことはできないが、「防老減老」を心がけたいものである。

石山の石にたばしる霰かな

誰でも詠めそうな句だが、調べているといろいろな興味深い事が分かってきた。まず一つは、この句は、源実朝の「もののふの矢並つくろふ籠手（こて）の上（え）に霰（あられ）たばしる那須の篠原」という歌を踏まえていることである。もう一つは、この「石山」とは、滋賀県大津市の石山寺であること。本堂は「硅灰石（けいかいせき）」という天然記念物の上に建てられており、数々の国宝・重要文化財を所蔵する。京都の清水寺、奈良の長谷寺と並んで「三観音」と呼ばれ、紫式部がこの寺で『源氏物語』の構想を得たとの伝説もある名刹である。

両の手に桃とさくらや草の餅

季語が三つもある上に大した内容でもないが、前書きを読んで句の背景が分かった。この句は、三月三日の桃の節句に詠まれたもので、「花月に富む。草庵に桃桜あり、門人に其角嵐雪あり」とある。桃と桜とは庭に咲く桃と桜であり、古くからの弟子の其角と嵐雪のことでもあり、二人を賞賛しているのである。しかし、芭蕉には多くの弟子がいたが、「軽み」を理解するものはおらず、結局、

後継者となる者がいなかった。のんきに草の餅を食べている場合ではなかったのである。

水仙や白き障子のとも移り

季語の重複といえば、この句の「水仙」と「障子」もそうである。しかも、「白き」と分かりきったことをわざわざ書いている。ここで、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」の一節を思い出した。「もし日本座敷を一つの墨絵に喩えるなら、障子は墨色の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。私は、数寄を凝らした日本座敷の床の間を見る毎に、いかに日本人が陰翳の秘密を理解し、光りと蔭との使い分けに巧妙であるかに感嘆する」。水仙は最も暗い床の間にあり、最も明るい障子の白が移ったのである。